

『子ども学のすすめ』西九州大学子ども学研究会編

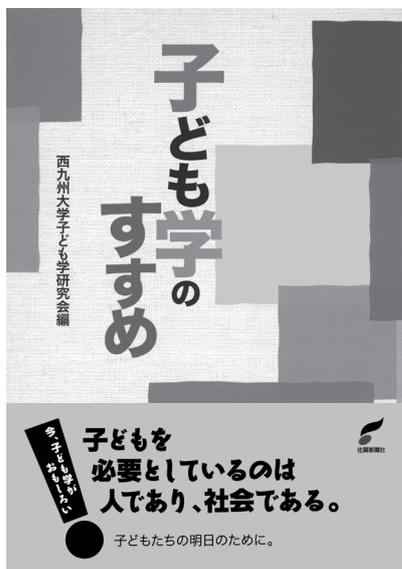
井上, 豊久
福岡教育大学

<https://doi.org/10.15017/1456153>

出版情報：生活体験学習研究. 13, pp.99-100, 2013-01-25. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

『子ども学のすすめ』

西九州大学子ども学研究会編



本書は「子どもと子育てをめぐる社会システムの構築が、公と私の協働で進められている。『子ども』がこれほどクローズアップされた時代は、いまだかつて存在しなかった」という社会背景で生まれてきた、ととらえている。そして、子ども学は「子どもを研究の対象に据え、子どもについての科学的理解をめざすと同時に、子どもの幸福の実現に寄与することをめざした学問」であり、本書でも「伝統的学問の枠組みを越えて、多様な視点と方法で子どもと子ども期を見つめなおし」ており、まさに、次世代育成の希望が託された内容となっている。しかしながら、あらかじめ、記述内容は西九州大学関係者によるという限定されたものであるということは押さえ置く必要があるだろう。

本書は、以上のような問題意識のもとで作成された学際的なアプローチによる共同研究の成果である。構成は第1部「変化する社会と文化のなかの子ども」では、時代の変化でも普遍性を持つ「子どもの本性」、続いて西洋と日本の歴史における子ども期の変遷を概括し、現代の子どもや教育の様態をジェンダーやエスニシティの視点から検討している。第2部「自然と子どもとの共生」では、自然的存在としての子どもに着目している。子どもという生命の誕生と発育の過程、子どもをとりまく自然環境の変化、子ども期における自然体験と環境教育の

意義等について論じている。第3部「子どもの生活体験と子育て支援」では、現代の子育てが抱える課題に迫っている。特別支援の子ども、生活体験学習、親による育児の孤立化という、現代的な課題に正面から取り組み、実践的な解決方法を提示しようとしている。専門書、大学でのテキストとしての活用だけでなく、子育て関係者や一般への啓蒙書として、比較的わかりやすい表現で記述されているという特徴があるだろう。

すべての内容について、論ずることは紙面の都合上困難であり、幾つかの特徴的内容について評する。子どもの本性の内容の中では、生物学的基本事項を的確に押さえていることに加え、子ども学の基本となるものとしてとして、特徴的な内容「遊び」と「自立」について項目をたてて記述している部分は本質的な課題を改めて学問的にとらえ直しているということで評価できる。遊びに関しては「子どもの成長にとって最も必要なものは『遊び』である」と断言し、子どもにとっての遊びは大人とは異なり「生活を通して生活に必要な基本技術や人との付き合い方を学ぶ一種の訓練、大人になるために欠かせない行動である」と意味づけている。中でも自然体験学習の重要性を示した上で、「自立」という子育ての究極の目標へとつなげている。自立の項では、乳児期から丁寧に自立に向けての子育ての留意点を記述している。ただし、内容をよく読み込めば理解できるが、「親や大人は安全にだけ気をつけて子どもの発達を見守るという『子守の思想』で子育てをしたい」というまとめで示された結論は、放任してもよいなどと短絡的にとらえられる恐れがあり、生活習慣づくりや指導の必要性を一言入れておく必要があるのではないと思われる。

日本の子育ての章では史的な分析を踏まえた上でジェンダー・バイアスについて鋭く切り込んでおり、「他者との相互理解と協力を学んで生きるために、性差にとらわれない子育てや教育の在り方が問われている」という男女共同参画が社会において進展しているといわれる中で敢えて苦言を呈している。願わくば、子どもの権利条約の視点を入れ、延長保育の問題など男女共同参画社会の進展における我が国の政策実施の中で、子どものよりよい成長・発達の視点からの課題についてもさらに論述が欲しいと

ころであろう。第9章では本学会の永田誠会員が「子どもの生きる力を育む生活体験」というテーマで論じている。生活体験学習の中でも佐賀県における通学合宿の特徴と展開過程を考察する中で、生活体験の持つ教育的意味について考察している。「早寝早起き朝ご飯」に対する子どもを中心とした教育的関係性の再構築の指摘は現代的課題を踏まえたものであるが、そこには子どものよりよい成長・発達に関しての社会構造的な課題が大きく存在することを提示していくことが求められよう。数量的な分析から通学合宿の効果として示された課題解決能力、身辺的自立、社会的自立、心身の健康の4項目は多少抽象的とはいえ、今後の体験学習研究の1つのメルクマールとなるものであると評価できる。そこで、示された「通学合宿型生活体験学習による地域の教育力概念図」は同心円で広がっていく形でわかりやすく、示されているが、同心円では捉えられない関係性も今後は図式化していく試みが期待され

る。今後は生活体験学習におけるより精緻な通学合宿の位置づけや連携で触れられにくい家庭との関係を詳細に検討し、提案していくことが求められよう。

本書全体を概観していえることは、試行的な学際的研究、中でも、自然科学系分野、人文・社会科学系分野、医療系分野という3つの分野が取り上げられ、多角的な視点で意欲的に切り込まれているが、研究上の対話がどこまで活かされて記述されているかは、見えずらいということである。子ども観が示されているが、市民性、参画、リテラシーなどの視点がさらに求められよう。学際的研究は研究分野の縦割りという視点や個人々の専門的力量的の統一化という視点からも困難であることは当然であるが、個々の内容が子ども学という視点からさらなる深化・総合化が図られることを期待したい。

[佐賀新聞社、2012年、1500円 + 税]

(福岡教育大学 井上 豊久)